世田谷村日記

石山修武

九月二十一日

七時過うさぎのツトム（最近はおっちゃん、おっちゃんと呼ばれている）が淡い光の溢れている東の空を眺めている。そう言えば昨夜、猫のイワノフも窓の外のちょっとしたレール部分に乗り出して、夜空を見上げていた。ネパールの高地で、ボーッとヒマラヤの嶺々を眺めている人間やヤクが沢山居るのを良く知っている。うさぎや猫やヤク、人間は時に遠くを眺める習性があるのかな。

九時明大前。昨日彩色した版画を忘れてしまい、家に電話して家内に今夕のときの忘れもの展覧会のオープニングに持ってきてもらう事にした。九時半過武蔵境着。約束の時間より三〇分も早いので駅前のＨＯＴＥＬ・ＭＥＴＳのコーヒーショップでエスプレッソ。武蔵境は毛綱の一周忌以来だな。あの時に咲いていた紅白二双のサルスベリの花は今年も又、咲いているのだろうか。あの花は毛綱の生れ変わりだぜ、きっと。毛綱がのめり込んでいったオリエンタル、コスモロジー、そして風水のキッチュが主人不在の哀切の中で真夏の抜けるような青空に旗印の如くに浮いていた。ああいうハッキリとした才能の形には毛綱が去って以来、誰一人として会っていない。皆、相対的思考という一見すると極めて倫理的な思考の中でキョロキョロしている人ばかりだ。その点毛綱は絶対的一点を希求し続けた。十時三〇分配島工業の若者と十川アパート取壊し現場へ。二十代前半の仕事だったが、すでに草ボーボーの空地になったのを確認する。十一時西武新宿線田無駅。今日は四時頃青山のギャラリーに行かねばならぬのだが、午後の時間が中途半端だな。十二時研究室。十五時半青山、ときの忘れもの展覧会場。新しく仕上がった銅版画にサインを入れたりする。十七時頃よりオープニング。三々五々と顔見知りの顔や、知らぬ顔の人が集まってくれた。何点かの作品も買ってもらった。十九時過、皆さんと近くの中華料理屋へ。二十一時修了。世田谷村に戻る。何だか初めてのような体験でいささか疲れた。建築の展覧会は何度か経験しているが、それは展示物そのものが商品として、値がつけられ販売されるというものではない。美術的な品物は展示物そのものが不思議な商品になっているのが、面白い。

九月二十二日

八時半新宿。野村と鶴間へ。現場説明会。十時現説。七社参加。十三時前小田急線にて新宿へ。古木理事長等と中央林間のコーヒーショップで話し合う。建築工事は絵のようには自由にできないところが面白いと考えたいのだが、本当に雑事の山である。昼飯を食べ損じて空腹の極み。新宿でソバ喰べて、十四時半丸の内へ。雑用。十六時前修了。銅版画大判のモノに彩色するために青山のときの忘れものギャラリーへ。十九時前彩色の仕事修了。綿貫さん、福井の荒井さん、塩野君等と会食。二十一時過世田谷村に戻る。坂田明から最新作ＣＤ「赤とんぼ」送られてくる。

九月二十三日　休日

「赤とんぼ」

夜は、坂田明の「赤とんぼ」「家路」を聴きながら、いつの間にか、深い眠りに落ちた。何の作為も視えぬ自然体の音楽だった。

一時健康を害し、休養したと聞いていたが、坂田明は彼の身体を介して一種のドン底を視たのだろう。この底の知れぬ程に柔らかく開放的な音楽は、彼の身体が暗闇にあった状態からの帰り道、固くいえば平安への帰還の状態が表現されているように直観した。坂田は身体の闇を体験し、身体の平安状態がいかに奇跡的なものであるか、その平安がいつでも突然崩壊していまう現実に対面し得たのではないか。

音楽は時間の芸術である。刻一刻の音の変化、配列の妙を楽しみ尽くそうとするものだ。常に流動、変転する。ここに表現されているのは、その原理のフォルムのようなものだろう。山田耕筰作曲の「赤とんぼ」は日本の高度経済成長以前の、つまりアメリカ文化化する以前の日本人の抒情の質を代表するものの一つだった。詩とあいまってその叙情の透明性は俗なセンチメンタリズムを超えていた。感傷性はしかし、確実に抒情の一角を占める。坂田の抒情は彼の身体の暗闇状態を経て、無常の平安の感性に辿り着き、その事によって感傷の傷も自然に乗り越えてしまった。我々に共通するかも知れぬ抒情の姿が明快に示されようとしている。

その抒情がＪＡＺＺというアメリカン・モダニズムの極とも言うべき方法で生み出されているのが実に興味深い。聞きかじりではあるが、ＪＡＺＺの源泉はアフリカからアメリカ大陸に移送された黒人の悲哀の音楽ブルースであったらしい。坂田はＪＡＺＺの中でもフリージャズと呼ばれる前衛的なフィールドで活躍してきた。その体験、病の経験等を経て、坂田は何処かに深く帰りつつある。生老病死は、誰もが対面しなければならぬ宿命であり、現実だ。坂田の「赤とんぼ」の驚くべき内的充実と抑制は恐らく、その現実への対面を経て得られたものであろう。

急に坂田明の声が聞きたくなって、家に電話してみたら、何と居た。二十七日からアメリカだそうだ。眠そうな声だったからまだ寝ていたんだ。悪かったと思い早めに切り上げた。絵描いてるらしいじゃない、って言ってたから、私の展覧会の知らせは行っているらしい。俺はたいした人間じゃないが、友人だけは凄いのがそろってる。赤とんぼ聴いてそう確信した。坂田も来年は還暦だ。お互い自然に、帰り道に入っていくのだが、マァ自然に、自然に突張りたいものです。

坂田の生身の声を聴いていたら、何故かデューク・エリントンとコルトレーンのイン・ナ・センチメンタルムードも聴いてみようと思い付き、今聴いている。この曲の抒情の構築性も凄いが、坂田の「赤とんぼ」はデューク、コルトレーンという巨匠が残した成果とは違う、未開の縁に満ちた、それでも荒野を示し得ている。ＪＡＺＺの分野で黄色人種として、アメリカの黒人に互していくのは大変なハンデがあるだろう。坂田明の「赤とんぼ」は、その可能性をも示し得ている。分野の壁を超えている自由がある。これを入手するには、坂田明いわく、「この作品を、巷で見つけて『おっ！なんじゃこれは』ということはまずございませんので。」というわけで〒３３５　０００１埼玉県蕨市北町４　４　３０　ＤＡＰＨＨＮＩＡまで￥２６２５円と送料を同封して申し込んで下さい。又、坂田明のサイトはhttp://homepage3.nifty.com/sakata/。淡路島の山田修二に早速電話して「赤とんぼ」すすめた。もっと多くの友人に電話してみようとも思ったのだが、「赤とんぼ」かよ、とか言われそうなので止めた。

今日は一人きりの世田谷村でもの想いにふけりがちになるといかんなと考えて、昼食後、大判のドローイングにとりかかる。綿

貫さんが送ってきた一番大きな紙に挑戦する。十七時過、大きなの一点仕上げる。集中したので完璧に疲れた。「荒地を横切る」と名付ける。坂田の「赤とんぼ」をズーッと聴きながらやったので、少しはあたたかく、明るい空気のドローイングになったような気がするがどうか。

塩野君、十九時世田谷村に出来上がったドローイングとりに来る。ときの忘れものに持ち帰ってすぐ展示にかかるつもりらしい。絵を描く人は要するにロボットだな。しかし、描きたいモノがあるうちに沢山描いておこう。あんまりこういう機会は多くないだろうから。